

太宰治「待つ」論： 「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2003-03-01 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 井原, あや メールアドレス: 所属:
URL	https://otsuma.repo.nii.ac.jp/records/1379

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



太宰治「待つ」論

——「京都帝国大学新聞」との関連を踏まえつつ——

井 原 あ や

はじめに

コント「待つ」の初出誌は長い間わからなかった。これが「創作年表」の「昭和十七年三月号、コント、京都帝大新聞六枚」に当たることを「ユリイカ」の故伊達得夫氏が教えてくださった。伊達氏は当時、同新聞の編集部にて太宰に原稿を依頼し書いてもらったが、「待つ」の内容が時局にふさわしくないという理由で原稿を返したと、伊達氏から直接聞いた。(津島美知子『増補改訂版 回想の太宰治』人文書院、平9・8)

ここで津島美知子の言う「三月号 コント 京都帝大新聞 6」の記述は、昭和「十四年頃から原稿の注文帳となり、執筆、発表したものを残し、断ったものを掲載の延びたものを抹消」(前掲書)した太宰の「創作年表」(第一〇次筑摩書房版『太宰治全集 別巻』平4・4)、「昭和十七年」と記された頁に確かに残されている。そしてこの記述の上には抹消線が引かれており、それが「原稿を返」された、つまり返却され、雑誌・新聞に未発表となったしるしであるということ

がわかる。

四百字詰め原稿用紙にしてわずか五枚のコントである「待つ」は、戦時下の太宰の姿勢を示すものとして、そして「京都帝大新聞」から依頼を受けたにもかかわらず、「時局にふさわしくない」と返却されたという特殊な背景を持つため、これまで比較的論じられる機会の多い作品であった。その論の大半は、「少女が待っているのは、いったい誰なのか」（佐古純一郎氏『太宰治論』審美社、昭38・12）という問いのもとに、答えを見つけ出すべく「待つ」を読むという形式がとられている。そして「キリストとの人格的な出会い、邂逅」（前掲書）、「神、救い、罰、死」と軽々しく口に出してはならぬ、もっと深い、何か（奥野健男氏「解説」『定本太宰治全集 第五卷』筑摩書房、昭37・7）、「暗い戦争の終結」（別所直樹氏『太宰治の言葉』新文学書房、昭41・9）、「新しい道德の行なわれる社会、自分の考えを思いきり大声で表明できる時代」（渡部芳紀氏「編年史・太宰治へ昭和十七年」）、「國文学 解釈と教材の研究」昭45・1）、「この上もない素晴らしい幸福」（柳本博氏「太宰治の「待つ」もの」）、「独協中学校・高等学校研究紀要」昭60・3）、「直接に表現できる芸術」（千葉正昭氏「待つ」論―叙法・実相・時代―）、「太宰治研究 第八卷」平12・6）等が「待つ」ものの答えとして挙げられてきた。

このように「待つ」ものの具体的な答えを論じることが、従来本作品に言及された論の主流を占めており、「待つ」の掲載予定誌であった「京都帝大新聞」について触れているものは管見に入った限りではない。太宰にとって昭和一五年八月五日号に組まれた「銷夏特輯」¹「山」の部の「貪婪稿」に続く二度目の発表作となるはずであった「待つ」を、「時局にふさわしくない」と返却した「京都帝大新聞」の、その内容や執筆者など、作品発表舞台の当時の状況を見直すことも「待つ」を読む上で必要なことなのではなからうか。（ちなみに、『日本近代文学大事典』へ講談社、昭52・11）には「帝国大学新聞」の項はあるが、「京都帝国大学新聞」の項はない。）

そこで本稿では、本来「待つ」が掲載されるはずだった「京都帝国大学新聞」（「京都帝大新聞」の正式名称。以後、本

稿ではこの名称に統一する。)の昭和一七年前後の紙面状況と、「時局にふさわしくない」と判断され、掲載を拒否された作品「待つ」との差異を確認することから始めて、「待つ」一篇の読み直しを目指したい。

I

大正一四年四月一五日創刊の「京都帝国大学新聞」は、創刊当初は一日と一五日の半月刊、その後旬刊制、週刊制に移行し、最後には月二回、五日と二〇日に一部五銭(年間一円。学生、教官は無料配布)で発行され、紙面は昭和一七年一月五日号までは全四面、以降は用紙不足のため二面のみで構成されることもあり、その用紙不足が原因となつて一九年三月五日号(通算三七八号)で終刊した。⁽²⁾

昭和一〇年代に入つて、昭和八年五月に起きた滝川事件⁽³⁾により編集員の退部と新聞の再建を繰り返してきた⁽⁴⁾「京都帝国大学新聞」も、一般紙・誌が「日支事変以後は「拳国一致」「八紘一宇」などのスローガンのもとに、新聞・雑誌その他のジャーナリズムは国民精神総動員運動に駆り立てられ」たのと同様に、「紙面にも、国家主義的な、日本精神の研究や、戦時体制の構築を主張する論文が掲載され、一方では従軍記や戦場写真などがニュースに表われるようになっていった」⁽⁵⁾。その後、昭和一六年八月五日号(三三四号)に掲載された「緑蔭選集・四題」と題された中の、堀川直義(署名は堀川紫苺)による「S夫人行状記」などが物資不足を描いたコントであつたため、この号は発禁処分を受けた。この発禁処分のおかれていますることを意識せざるを得ない状況に追い込まれていくのである。太平洋戦争に突入した昭和一六年一二月以降には、学徒動員により編集員も減少し、「待つ」の掲載が予定されていた一七年には一、三人の編集員で編集作業を行ないながら、かろうじて刊行を維持するという状況だつた。この二、三人の編集員のうちの一人が、本稿冒頭に紹介した津島美知子文に

名前が出た伊達得夫だったことになる。

こうした戦時下の言論統制を受けてきた新聞の、昭和一七年三月五日号（三四四号）に、太宰の「待つ」は掲載される予定であったのである。

ここで、太平洋戦争の勃発した昭和一六年二月八日以降から、「待つ」掲載予定号であった昭和一七年三月五日号までの「京都帝国大学新聞」に掲載された主な記事の見出し及び執筆者を確認してみよう。

・昭和一六年二月二〇日号

「戦争と科学徒」

本学理学部教授 駒井卓

「世紀の決戦」

本学文学部教授 原隋園

・昭和一七年一月二〇日号

特輯「世界新秩序の構想」

「世界新秩序の構想と大学の使命」

本学文学部教授 小牧実繁

「大東亜戦争の完遂と大家の論理」

本学経済学部教授 石川興二

・昭和一七年二月五日号

「戦時と平時」

本学経済学部教授 高田保馬

特輯「南方共栄圏」

「大東亜戦争の展望 勝敗の鍵は強靱なる生活力」

本学経済学部教授 谷口吉彦

「華僑の問題 華僑対策論」

本学経済学部教授 松岡孝兒

「大東亜戦争と南方資源―基本的な問題との連関」

本学経済学部教授 蜷川虎三

「熱帯医学の課題 大東亜建設に於ける問題性」 本学医学部教授 鈴木憲二

昭和一七年三月五日号

「戦捷第一次祝賀会祝辞」

総長 羽田亨

特輯「南方印象記」

「刺刺しい！シンガポールの感触」

本学法学部教授 西本穎

「古き町、バタヴィア」

本学文学部教授 西田直二郎

以上のような記事が、この時期の新聞を飾っていたのである。

各号を詳しく見ていくと、昭和一六年一二月八日の真珠湾攻撃を契機とした「大東亜戦争」を受けて、同年一二月二〇日号の「京都帝国大学新聞」は、右に挙げた随筆のほかにも「我等のペンを剣にかへて、逆まく太平洋の怒涛を蹴つて聖戦に起つ日も近いのだ」と「学園にうづまく感激」を伝えて昭和一六年を総括している。この論調は翌一七年を迎えて一段と増幅していくことになり、一七年になって初めて発行された二月二〇日号には、その前年に「研究室の扉を敲く」と題して毎号学内の研究室を紹介していた連載記事が、「戦時下の学生」といういかにも時局を意識した連載に変更されている。⁽⁶⁾ このような記事から考えてみても、発禁処分を受けながらも時局に沿うことによつて生き残ろうとする編集員たちの意図が見えてくるのではなからうか。続く二月五日号には、第一面に「報国隊二度目の出勤」という学徒隊員の防空演習の写真飾り、紙面全四頁のうち、二頁にわたつて先に挙げた「南方共栄圏」特集を組むなど戦時特色は濃くなる一方である。そして「待つ」が掲載される予定であった三月五日号には、二月一五日のシンガポール陥落に関連した「万歳の声響き渡る 第一次戦勝祝賀会」と祝賀会の様子が掲載されている。

「学生の編輯は、何も世間一般の職業雑誌の編輯技術を標準として成功不成功を決定しなくてはならぬといふわけは無い。

学生は編輯者ではない」と、「一般の職業雑誌」と「学生の編輯」する雑誌の違いを言うのは「諸君の位置」(月刊文化学院)昭15・3。なお、この部分は初版本『信天翁』へ昭南書房、昭17・11へならびに再録本『太宰治随想集』へ若草書房、昭23・3へでは削除されている。)の「私」であるが、連日「大東亜戦争」の戦況を報道し、国民の戦争への意識を高めようとした一般の新聞各紙と同様の路線を歩む、もしくは歩まねばならなかった「京都帝国大学新聞」の状況を、これらの記事から読むことが出来るはずである。

さてここまでは京大教授という、謂わば大学関係者の記事を見てきたのだが、太宰のような大学に関係の無い文学者の同紙への寄稿ほどの程度であったのであろうか。

「待つ」が掲載されるはずであった昭和一六年度(昭16・4・20〜17・3・5)に発行された「京都帝国大学新聞」には、ほとんど毎号に文学者の名前が見られる。この年度に寄稿していた文学者たちは、次の通りである。(なお、新聞の「執筆者紹介」欄及び掲載記事の末尾に筆者紹介がある場合には、カッコ内に記した。)

楠田敏郎 「雨の宇治」(昭16・4・20)

中村草田男 「落花へ高く」(昭16・5・5)

板垣直子 「出版インフレと文学の反省」(昭16・6・5)

森三樹雄 「立夏」(昭16・6・5)

前川佐美雄 「初夏漫吟」(昭16・6・20)

寺岡峰夫 「文学の苦悶 批評について」(昭16・7・5。「文芸批評家」と記載)

楠田敏郎 「夏の京都風物」(昭16・8・5)

加賀歌二「京の夏」(昭16・8・5)

萩原井泉水「竹林―嵯峨にて十句」(昭16・8・5)

山田清三郎「満州文学の現在と将来」(昭16・9・20)

伊東静雄「九月五日子病む」(昭16・9・20。「本学文学士」と記載)

井上靖「無声堂」(昭16・9・20。「大阪毎日新聞文化部記者」と記載)

保田与重郎「日本文学の将来」(昭16・10・5)

山岸外史「日本文学の将来」(昭16・10・20。「文芸批評家」と記載)

高橋新吉「電車」(昭16・11・20)

三木清「青年と宗教」(昭16・12・20。「評論家」と記載)

川田順「太平洋」(昭17・1・20)

臼井喜之介「木銃のうた」(昭17・3・5)

以上のような錚々たるメンバーの一人として太宰は選ばれ、「待つ」を発表する予定であったわけだ。

この一覧の中で特に注目したいのは昭和一七年の二篇である。先に確認した「京都帝国大学新聞」自体が、昭和一七年から一段と戦時色を濃くしていったのと同様に、やはり文学者の寄稿も一七年に入ってから二篇の方が戦時色は各段に濃い。

歌人の川田順は「太平洋」と題した短歌五首の中に、「英吉利も亜米利加もやがて滅びてはこのわたつみの泡沫の如きのみ」「太平洋を亜細亜の海になさむとぞ大みいくさは西に南に」といった戦争協力の歌を寄せている。また「待つ」が掲載される予定であった三月五日号には、詩人の臼井喜之介が以下の詩を寄稿している。「あかつきのひかりゆれつつ／あかつ

きのひかりのなかに／木銃執り兵ら佇ちたり／とる銃の肌へつめたく／とるつゝのはだへ親しき／はらからいくさに発ちて／とる銃もかくてやあらむ／あかつきの風さむけれど／しんしんと通ふものあり／しみじみとゆるゝものあり／あかつきのひかりゆれつつ／あかつきのひかりのなかに／白き鳩むれてとぶみゆ／白鳩のむれとぶ空に／はくめいのひかりゆれたり／あかつきのひかりの中に／われもまた銃とりてゐて／はらからのいくさをおもふ／白鳩とか、はりなけど／あつきもの胸にたぎりぬ／白鳩のしろさかげゆれ／あかつきのひかりたゞよふ／あかつきのひかりの中に／兵士らはつつを構へぬ／いまはただ／ひたすらなれとつつを構へぬ」という、「木銃のうた」と題された詩である。こうした姿勢、すなわち一七年を迎えて学生の「大東亜戦争」への戦意高揚を直指していた新聞の中に、戦争への協力を表すわけでもなく、兵士の姿を描いたわけでもない、「大戦争がはじまつて、何だか不安で、身を粉にして働いて、お役に立ちたいといふのは嘘」でそれは「立派さうな口実」かもしれないと呟く「待つ」の「二十の娘」の声は、到底入れることは出来そうもないし、その作品のベクトルが、時局が求めた昭和一七年掲載の二篇とは全く正反対の方向を指していることは間違いない。

当時のメディアの論調とは明らかに異なる方向を向いている「待つ」。しかるに本作品は、「京都帝国大学新聞」編集部からの原稿の返却を待たずに、急いで滑り込ませるように作品集『女性』（博文館、昭17・6）の中に収録されることになる。

II

「原稿の返却を待たずに」というのは、

ただいま、別封速達で、「待つ」といふ新原稿、お送り致しました。五枚の短篇ですが、あの「恥」といふ作品の次

に（つまり、「恥」と「あとがき」の間に。）入れて下さいまし。最後の、しめくくりに適した作品だと思ひますから、どうか、そのやうに、お願ひ致します。（中略）これは京大の新聞に送つたのですが、間に合はず、原稿のコピーを送つてもらつたのです。（昭和17・2・20付、博文館出版部石光葆宛書簡、傍線井原）

と記したような背景が、作品集『女性』に収録される「待つ」にあるからである。この二〇日付書簡の後にも、「先日お送りした「待つ」は、「恥」の次に組み入れて下さいまし。目次の校正の時も、そのやうに直して置いて下さいまし。」（昭和17・2・24付、博文館出版部石光葆宛書簡）という書簡を再度送っている。こうした二通の書簡から、太宰が「待つ」に対して、「原稿のコピー」を送ってもらつてまでも『女性』に収録する必要がある、「しめくくりに適した作品」という意識を持っていたことがわかる。

この「待つ」が『女性』に収録されることが決定した際、すでに『女性』は二度目の校正刷りが出来上がっていた段階であった。二度目の校正刷りについて記した書簡の後には、『女性』全体の校正について書かれた書簡はない。つまり作品集『女性』は二度の校正を経て、校了の段階、すなわち完成に近い段階まで来ていたにもかかわらず、太宰はこの中へ強引に「待つ」を組み込ませたのである。

「待つ」を収録する『女性』は、本来八篇で構成されていた作品集であった。所謂〈女性独白体小説〉ばかりを収録したこの作品集の内容は、収録順に並べて次の通りである。

「十二月八日」（『婦人公論』昭17・2）

「女生徒」（『文学界』昭14・4）

「葉桜と魔笛」（『若草』昭14・6）

「きりぎりす」(「新潮」昭15・11)

「燈籠」(「若草」昭12・10)

「誰も知らぬ」(「若草」昭15・4)

「皮膚と心」(「文学界」昭14・11)

「恥」(「婦人画報」昭17・1)

「待つ」はこの八篇の最後に収録されたのである。

『女性』という一冊の作品集について考える際、昭和一六年の(二月八日)を迎えた主婦の日記を先頭に配置した作品集という点も重要であるが、もう一つ、当時(反戦画家)として新聞に報道され、官憲にマークされていた画家阿部合成が『女性』の装幀を担当していたという点も見逃せない。ここで画家阿部合成について少し述べてみたい。⁽⁷⁾

阿部合成は太宰と同郷の青森県出身であり、太宰とは学生時代からの友人である。阿部合成が上京した昭和一二年から、再び二人の交際は盛んになり、それは一八年に合成が召集されるまで続いた。⁽⁸⁾合成がこの昭和一二年に二科展に出品し、特選となった『見送る人々』と題された大作は、翌一三年には中南米巡回日独伊三国美術展出品へ向けて送られ、一方では雑誌「国際写真情報」の「戦争画特集号」において口絵として掲載されることになる。ところがこの「国際写真情報」に掲載された『見送る人々』が、「当時アルゼンチン大使だった小幡西吉の眼にふれ、両作(井原注・合成の『見送る人々』と向井潤吉の『突撃』の二作)とも反戦絵画ではないか」と日本政府に連絡してきたため、新聞にも「『聖戦の認識』を誤る」(「東京朝日新聞」昭14・2・15)という見出しで大きく報道されてしまう。この騒動以後、合成は昭和一八年に召集されてからも(反戦画家)として官憲にマークされ続けることになったのである。

「阿部合成君には、私からお願ひして快諾を得ました。信頼できる人ですから、安心して話合つてやつて下さい」(昭17・

1・21付、博文館出版部文芸課石光葆宛書簡」と、当時（反戦画家）として知られていた画家阿部合成を、太宰自身が『女性』の装幀担当に推薦したという事実は、作品集『女性』の持つ意味を考えるとときに重要であると同時に、その作品集の末尾に置かれた「待つ」一篇の立つ位置、立場を示すものとしても重要であると思われる。

「十二月八日」を先頭に置き、（反戦画家）阿部合成を装幀担当に選んだ作品集『女性』の「しめくくりに適した作品」としてもう一度送り出された「待つ」は、戦時下という困難な時代に対峙するものとして『女性』に配置された作品なのではなからうか。昭和一七年という戦時下にあつて、『女性』の中に「待つ」を編み直す意味とは、そして「待つ」の持つ力とは何なのであろうか。

III

「待つ」は冒頭から、「省線のその小さい駅に、私は毎日、人をお迎へにまゐります。誰とも、わからぬ人を迎へに」という相反する言葉突きつける。「お迎へにまゐる」という行動は、迎えるべき人があつてこそ可能な行動である。しかし「私」は迎えるべき人が「誰とも、わからぬ」と言う。このような矛盾に満ちた行動をする「私」が冒頭で伝えられるのである。

当然のことながら、「待つ」は「私」という一人称形式の語り手によって語られている。

ある出来事を叙述する場合、語り手は自分の遠近法に基づいて、出来事を一つの全体として叙述するのである。その場合、限りなく無数に存在する情報の中から自分にとって必要と思われる部分だけを選び取り、そこから一つのまとまりある全体（物語）を作り出すのである。この選択と省略は、全ての叙述に共通する原理である。（前田彰一氏

右の引用文が示すように、「必要と思われる部分だけを選び取」って物語ることが「語り手の機能」ならば「私」は何を「選択」してこの「待つ」を物語ることか。「私」は敢えて矛盾に満ちた言葉を選び取って私たちに突きつけたのである。この問題については後に述べることにして、先に引用した冒頭部分から「私」が「お迎へ」する人が、一体誰であるのか、「誰とも、わからぬ人」を見つけて出すことを目的に「待つ」を読もうとする姿勢が、つまり従来の「待つ」ものの具体的な答えを導き出そうとする姿勢が生じるのである。

迎えに行くのは誰かわからずとも、とりあえず「人」には違いないと思っていると、すぐに「私」は「いつたい私は、毎日ここに坐つて、誰を待つてゐるのでせう。どんな人を？いいえ、私の待つてゐるものは、人間でないかも知れない」と話し出す。駅のベンチに座っている「私」の視線の先には、改札口を出た「人」の姿が確かにあったはずである。それにもかかわらず、「私」は「人間でない」という答えを導き出し、その答えさえも「かも知れない」と覚束ない様子を見せる。以下、「私」は自問自答を繰り返しながら自分の「待つ」ものの正体を、話し続けることで見つけ出そうとしているかのようなのである。「人間でない」と否定した「私」であったが、再び、「どなたか、ひよいと現れたら！といふ期待と、ああ、現はれたら困る、どうしようといふ恐怖と、でも現はれた時には仕方が無い、その人に私のいのちを差し上げよう…」と、「待つ」ものは「どなた」「その人」という「人間」として表されている。しかし、「待つ」ものが「人間」であるという地点までは辿り着いたが、その先に示されるべき「待つ」「人間」とは誰なのか、その答えが一向に見出せない「私」は物語の後半に入って、自分自身に三度問い直している。

ああ、私は一体、何を待つてゐるのでせう。

一体、私は、誰を待つてゐるのだらう。

それでは一体、私は誰を待つてゐるのだらう。

よく似た疑問文だが、「私」はこの中で「待つ」ものに対して「何を」と「誰を」を使い分けている。「私」は物語の後半に至って自らに問う時でさえ、「何を」なのか「誰を」なのか決め兼ねているようである。このような揺らいだ状態を一貫して取り続ける「私」から、「待つ」ものの具体的な答えを見出すことは不可能ではないだろうか。自身が問う対象物さえもわからず、自問自答して答えが出たとしても次から次へと否定し続ける先にあるものは、鈴木雄史氏が、「私」が待つているのは誰かという問に対しては、次のような明快な答えが返ってくるはずである。それは、作中では明確に示されていない、と。つまり待つ対象は空白なのである。」「太宰治『待つ』の表現作用」「論樹」昭63・9」と指摘するように空白なのである。鈴木氏はこの〈空白〉を、「読者行為」に関連させているが、私は〈空白〉自体を「待つ」の内容に即して読んでみる。私は、「はじめに」で紹介したような先行研究が目指していた「待つ」ものの具体的な答えを作品「待つ」の中から見出すことよりも、この〈空白〉と、〈空白〉を敢えて物語る「私」に注目したい。

事実、「私」はこう言っていた。「はつきりした形のものは何も無い。ただ、もやもやしてゐる」と。「待つ」を読む上でこれまで問題とされていた、「私」の「待つ」ものの具体的な答え、言いかえれば「はつきりした形のもの」について、「私」は「何も無い」と言っている。ここには、具体的な答え（「はつきりした形のもの」）を見出せず「なんだか、わからない」と呟くしかない「私」がいるだけなのである。

さてここで、先の前田氏の論をもう一度確認して考え直すと、それではなぜ「私」は「なんだか、わからない」〈空白〉としか言えないことを敢えて「選択」して物語ろうとするのだろうかという疑問が浮かび上がる。「私」に答えの出ない〈空白〉を生み出させたものとは何なのか、それを知る必要があるのではないか。

けれども、いよいよ大戦争がはじまつて、周囲がひどく緊張してまゐりましてからは、私だけが家で毎日ほんやりしてゐるのが大変わるい事のやうな気がして来て、何だか不安で、ちつとも落ちつかなくなりました。(中略) 私は、私の今までの生活に、自信を失つてしまつたのです。

「私」にとつての家は、「母と二人きりで黙つて縫物」が出来て、そして「一ばん楽な気持」になることが出来る安定した場所であつた。同様に、「今までの生活に、自信を失つてしまつたのです」と言う「私」の「今までの生活」とは、この「一ばん楽な気持」になれた、安定した場所であつた家での生活を指している。そして「今までの生活に、自信を失つた」と言う「私」は、自信だけでなく、「黙つて坐つて居られない」と、「今までの生活」自体も、つまり家という安定した場所さえも失つてしまふ。このように自信と場所の両方を失つた「私」は、自分を安定した場所から追い立てたものは「大戦争」であると言い、先に挙げた部分以外でも「私」は「大戦争がはじまつて」から自分の中に変化が生じたことを自覚しているのである。すなわち「大戦争」が安定した場所を奪つたということを契機として、明確な答えの出ない、「なんだか、わからない」へ空白を求め「私」の物語は始まるのである。

「大戦争」によつて安定した場所を失つた「私」とは、その「大戦争」という言葉が示すように、否応なく不安定な時代に放り込まれた人物である。そんな「私」が「大戦争」のもつて空回りする自問自答を繰り返し、「なんだか、わからない」としか言えないへ空白をそれでもなお「選択」して物語るのは、「なんだか、わからない」へ空白が「私」にとつて戦時下という不安定な時代を象徴するものだからなのではなからうか。

〈空白〉を語る「私」は明確な答えが出ないだけに、「かも知れない」や「やうな気もする」という言葉を使い、覚束ない様子を見せる。そうしたどこか不安げな「私」が揺るぎなく使い続ける「待つてゐる」という言葉には、注意を払う必要がある。 「私」は〈空白〉しかない不安定な戦時下に、「けれども私は、やつぱり誰かを待つてゐるのです」「けれども、私は待つてゐる」「けれども私は待つてゐるのです」というように、「待つ」ことをやめようとはしない。振り返つて考えしてみると、「私」はこう言っていた。

いつたい私は、毎日ここに坐つて、誰を待つてゐるのでせう。

ここに、かうして坐つて、ほんやりした顔をしてゐるけれども……。 (傍線井原)

傍線で示した「ここ」という指示代名詞に注目したい。「ここ」とは「話し手の現にいる場所」(『大辞林 第二版』三省堂、平7・11)を指し示している。「私」は「ここ」、すなわち駅のベンチに腰かけて、今「待つてゐる」状態を示しながら話しているのである。「待つ」という自分のポジションを改めて確認するかの如く、「私」は「ここに、かうして」と話す。こうした「私」の態度は「大戦争」という時代状況が示すものとは全く別の方向を向いている。

「国民一致して決死奉公せん」「一億国に殉じ仇敵撃滅」(『東京朝日新聞』昭16・12・9)、「必勝の一億進軍」(『東京朝日新聞』昭16・12・11)と、当時当たり前に使われていたこうした言葉に表された、国民一丸となった「大戦争」への自覚と行動と、国民の一人であるはずの「私」の態度とは明らかに異なっている。現に、「私」は「身を粉にして働いて、お役に立ちたいといふのは嘘」と、愛国心溢れる「二十の娘」になろうとはしていない。もとより彼女は、「私は、人間をき

らひです」と世間のありきたりの人間と自分との違いを話していた。「当らずさはらずのお世辞やら、もつたいぶつた嘘の感想」ばかりの世間も、人々も、「私」は「大戦争」が始まる前から嫌悪すべき存在として距離を置いていたのである。この距離感ほ、「大戦争」が始まってからも変わることなく「私」の中にある。「眼前の、人の往来の有様も、望遠鏡を逆に覗いたみたいに、小さく遠く思はれて、世界がシンとなつてしまふ」と、改札口を出て、彼女の眼の前を通り過ぎる人々と彼女の間には大きな差があることを確認出来る。

このように、「私」は国民が一丸となることを強制された「大戦争」のもとでも、一丸となるべく人々の間に入り交ろうとはしない。そしてそうした国民と距離を置いた自分の行動に対して、「なんだか頼りない気持」になると感じながらも、「私」は決して「ここ」に在ること、すなわち「待つ」ことをやめようとはしないのである。

私を忘れないで下さいませ。毎日、毎日、駅へお迎へに行つては、むなしく家へ帰つて来る二十の娘を笑はずに、どうか覚えて置いて下さいませ。その小さい駅の名は、わざとお教へ申しません。お教へせずとも、あなたは、いつか私を見掛ける。

「待つ」ことをやめない「私」は、最後に自信を持って決意表明の如く、右のことばを「あなた」に伝える。「私」は、この物語が終わつた後も、やはり時流に乗ることなく「毎日、毎日」待ち続ける「二十の娘」のままであるのである。その証拠に、「いつか私を見掛ける」と言うのである。

私たちは、従来「待つ」を読む上で大前提とされた彼女の「待つ」ものが何なのか、それを具体的に探し出そうとするのではなく、「大戦争」の時代の只中に、敢えてその「大戦争」によつて生じた「なんだか、わからない」へ空白の不安定さを物語り、先の「東京朝日新聞」で確認したフレーズを持った時流や、その時流に乗ることが良しとされた当時の国

民のあるべき姿と決別し、頑なに「待つてゐる」と言い続ける彼女の姿を作品「待つ」の中から見つけなければよいのである。そしてその彼女の姿こそが、作品「待つ」の放ち続ける力なのではなからうか。

太宰は戦時下に多くの作品を生み出した。その中で、「二十の娘」に「待つ」という決意表明をさせた、戦時下の作家太宰治の姿にも注目しておくべきであろう。

注

- (1) 太宰はこの号の「執筆者紹介」欄で「作家」と紹介されている。同様に、「銷夏特輯」「海」の部に「我がふるさと―佐渡の風景」を寄せた青野季吉は「評論家」と、「川」の部に「海道」の難所 大井川と妖艶島田髻の由来」を寄稿した和田篤憲は「本学経済学上」と紹介されている。
- (2) 「京都帝国大学新聞」終刊後、昭和一九年七月から二二年三月まで「大学新聞」の関西支社として新聞を発行し、その後名称を「学園新聞」「京都大学新聞」と変更している。(復刻版 京都大学新聞 第一巻) 京都大学新聞社、昭44・2)
- (3) 昭和八年五月、斎藤首相は京都帝国大学法学部教授滝川幸辰を「赤化教授」と見做し休職処分を発令した。この措置は「大学の慣行を否定するもので、京大法学部教官一同は連袂辞職で抗争し、学生も組織的に抗議運動を展開し、東大その他にも運動を波及させたが、ついに滝川の復職を実現させることはできず、京大法学部の教官は七月二十二日、辞任組と残留組に分裂し、抗議運動は敗北した。この事件は、満州事変後の日本のファッショ化の進行を示すとともに、それに対する知識人の組織的抵抗の最後の事例となった。」(「昭和ニュース事典」毎日コミュニケーションズ、平3・6)
- (4) 昭和八年五月の滝川事件の結果に異を唱えた「京都帝国大学新聞」編集員は総辞職を行ない、その後、一〇年五月にも滝川事件二周年記念講演会の記事の掲載禁止を不満とした編集員七人が退部している。
- (5) 「復刻版 京都大学新聞 第二巻」(京都大学新聞社、昭44・7)
- (6) 「戦時下の学生」とは各国の学生の姿を書いた連載であり、第一回にインド、第二回に仏領インドシナ、第三回に満州が取り上げられている。
- (7) 作品集「女性」と画家阿部合成の詳細については、拙稿「作品集『女性』の誕生―太宰治へ女性独白体小説」に関する一考察」

- 〔相模国文〕30、平15・3に掲載予定)をご参照頂きたい。
- (8) 東郷克美氏・渡部芳紀氏編『作品論 太宰治』〔年譜〕(双文社、平12・12、第三版)
- (9) 針生一郎氏編『阿部合成』(三彩社、昭51・7)
- ※本文の引用は「京都帝国大学新聞」掲載記事に関しては「復刻版 京都大学新聞 第二卷」(京都大学新聞社、昭44・7)を、その他は第一次筑摩書房版『太宰治全集』に拠った。